

語彙的動詞 dō - ‘put, do’ の文法化の事例としてのゲルマン語弱変化過去の発達

田中, 俊也
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/7318912>

出版情報 : 言語文化論究. 53, pp.83-86, 2024-11-05. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



語彙的動詞 **dō*- ‘put, do’ の文法化の事例としての ゲルマン語弱変化過去の発達*

田 中 俊 也

1. はじめに

ゲルマン語の動詞体系は、強変化動詞 (strong verbs)、弱変化動詞 (weak verbs)、過去現在動詞 (preterite-present verbs)、変則動詞 (anomalous verbs) という 4 種類の動詞によって構成される。これらのうち高い生産性を示すのが、強変化動詞と弱変化動詞である。強変化動詞はその過去形や過去分詞形を母音交替 (ablaut, vowel gradation) という形態的手段で形成するのに対し、¹ 弱変化動詞および過去現在動詞はその過去形や過去分詞形を歯音に由来する接辞によって形成し、このような過去形および過去分詞形は弱変化過去 (weak preterite) と呼ばれている (Prokosch 1939: §66 pp.193-199 などを参照)。² ゲルマン祖語における弱変化過去がどのように発達したのかという問題については、長い研究の歴史がある。従前の研究史の詳細については Collitz (1922) や Tops (1974) などに譲るが、歯音過去は語彙的動詞 **dō*- ‘put, do’ に由来するとする説が常に主流の考え方であったという点が重要である。本稿の目的は、語彙的動詞 **dō*- ‘put, do’ が文法化 (あるいは形態化)³ を経て、ゲルマン祖語の歯音過去が形成されたという観点から、近年の研究動向に考察を加えることにある。

2. 近年の動向

近年において、文法化研究が盛んになされるようになっていく。⁴ そのような中で、Heine and Kuteva (2002) は世界の言語からの事例に基づいて、文法化による変化のパターンを明らかにしようとした研究となっている。しかしながら、同書 pp. 117-120 は語彙的動詞 ‘do, make’ が文法化する事例を 5 つに分けて呈示している一方、これらの中には過去時制の発達は含まれていない。逆に、同書 pp.333-334では、過去時制が文法化によって発達する事例として、語彙的動詞 ‘do make’ からのものを含んでいない。更には、ゲルマン語における文法化の事例を考察する論考において、Hilpert (2011: 709) はゲルマン語に共通する弱変化過去に言及しているが、これが文法化によって発達したものかどうかについて何も述べていない。これらのことから、文法化研究の中で、ゲルマン祖語の弱変化過去 (歯音過去) は語彙的動詞 **dō*- ‘put, do’ からの文法化の事例であるという理解が定着しているとは言えないように思われる。

これに対して、印欧語比較言語学研究の動向はどうだろうか。ゲルマン語弱変化過去が語彙的動詞 **dō*- ‘put, do’ から発達したことにに関して、Ringe (2006) や Harðarson (2018: 55) は、単一語化 (univerbation)⁵ の事例であるとするのみで、文法化によるという見解は提供していない。他方、Hill (2010: 411 et passim) や Fulk (2018: 292) は、弱変化過去の発達を文法化 (grammaticalization) の事

例であるとしている。ただし、Hill や Fulk の論考において、弱変化過去の発達がなぜ文法化の事例だと理解できるか、また、なぜそのように理解するべきかということについての詳しい議論はなされていない。よって、ゲルマン語弱変化過去の発達が文法化による事例であるとする考えが妥当であることを、以下で確認したい。

3. 文法化の事例である証拠

Heine and Kuteva (2002: 2) によれば、文法化は「意味の漂白 (semantic bleaching)」「文脈の一般化 (context generalization)」「脱範疇化 (decategorization)」「音声的削減 (phonetic reduction)」の4つの過程に関わる言語変化だということである。ゲルマン語の弱変化過去が語彙的動詞 **dō-* ‘put, do’ から発達するに当たって、これらの過程を経ている可能性が高いことを以下に示し、弱変化過去は文法化の事例であることが確からしいことを示したい。

ゲルマン祖語の動詞 **dō-* ‘put, do’ は印欧祖語の語根 **d^heh₁-* に由来し、この語根は瞬時的な動作を表すアオリスト語根であったと考えられている。⁶ 「置く、行う」という具体的な語彙の意味が、過去時制という抽象的な文法的機能を表すように発達したことは、典型的な「意味の漂白」の例である。

弱変化過去の発達は、動作を表す弱変化動詞とともに始まったと考えられる。⁷ なぜならば、「行った」という語彙的な意味は、本来、動作を示す表現と共起するものだからである。しかしながら、ゲルマン祖語に至るまでに、状態を表す動詞も含めてすべての弱変化動詞および過去現在動詞に、弱変化過去が拡張されたと考えられる。⁸ このように、弱変化過去は「文脈の一般化」を経て発達したものだと考えられる。

印欧祖語 **d^heh₁-* あるいはゲルマン祖語 **dō-* ‘put, do’ は元々語彙的な動詞であり、文の中で様態の副詞などと共起して使うことが可能であった。しかしながら、弱変化過去へと発達するにつれて、それは他の動詞（弱変化動詞や過去現在動詞）の過去形を示す接辞へと変化し、この接辞そのものが様態の副詞などと共起することはなくなった。このように、弱変化過去は「脱範疇化」を経て発達したものだと考えられる。

最後に、弱変化過去の発達では、どのようにして「音声的削減」が関わったかを見ることにしたい。弱変化過去は、現代英語の *do* (< 古英語 *dōn* ‘do, put, make’) の過去形 *did* (< 古英語 *dyde*) による迂言表現 (periphrasis) が単一語化すること (univerbation) によって形成されたと考えられる。近年の Ringe (2006: 166-169) の提案によれば、動詞の過去分詞（の中性単数対格形）に ‘*did*’ に当たる動詞を加えて、‘*did Ved*’ という意味から「～することをした」>「～した」という意味が発達したということである。以下が、Ringe が提唱する弱変化過去の発達のメカニズムである。

(1) 前ゲルマン祖語の過去分詞 + *did* からゲルマン祖語の弱変化過去への発達

a. 弱変化 1 類

**wurhata dedē* ‘(s)he did (having) made’ → **wurhat(a d)(ed)ē* ‘(s)he made’ > **wurhatē* ‘(s)he made’ (cf. Go. *waúrhta*, OE *worhte*)

**wurhata dedūn* ‘they did (having) made’ → **wurhat(a d)ēdūn* ‘they made’ > **wurhatēdūn* ‘they made’ (cf. Go. *waúrhtedun*, OE *worhton*)

b. 弱変化 2 類

**salbōda dedē* ‘(s)he did (having) annointed’ → **salbōd(a d)(ed)ē* ‘(s)he annointed’ > **salbōdē* ‘(s)he annointed’ (cf. Go. *salboda*)

*salbōda dēdun ‘they did (having) annointed’ → *salbōd(a d)ēdun ‘they annointed’ > *salbōdēdun ‘they annointed’ (cf. Go. salbodedun)

Ringe は、上記の削減を受けた形をアレグロ形式 (allegro forms) であるとしている。アレグロ形式は、使用頻度が極めて高い表現において、長い音形がより短くより単純な音形で表現されるようになる変化である (Lass 1987: 88-89; Trask 2000: 15 などを参照)。しかしながら、弱変化過去の発達は使用頻度に関わらず、あらゆる弱変化動詞及び過去現在動詞において生じたものであり、文法化に伴って生じた音声的削減であったと理解するのが最も適切だと思われる。⁹

4. 結語

文法化の事例の代表的なものとして、フランス語動詞の未来形が挙げられることが多い。これは、元々所有の意味を表していた語彙的動詞が文法化することで形成されるようになったと理解されている (例: Latin *facere habeo* ‘I have to do’ → French (*je*) *ferai* ‘I will do’, cf. Hopper and Traugott 2003: 23)。¹⁰ Heine and Kuteva (2002: 242f.) も、have 型の所有を表す語彙的動詞が未来を表す接辞になることがあるとして、フランス語の例を含めて様々な言語からの例を挙げている。近い将来において、ゲルマン語の弱変化過去についても、文法化によって語彙的動詞が過去を表す接辞に発達したものであると広く認知されるようになり、新たに出版される文法化のハンドブックでも遍く言及されるようになることが期待される。

注

* 本研究は JSPS 科研費19K00553および23K00525の助成を受けたものである。

- 1 ただし、強変化 VII 類に属する動詞は、ゲルマン祖語 (およびゴート語) においてその過去形を畳音 (reduplication) によって形成した。
- 2 弱変化過去 (the weak preterite) は弱変化動詞の過去形のみならず、過去現在動詞の過去形をも形成することに注意しておきたい。こうしたことから、当該の形成物を歯音過去 (the dental preterite) と呼ぶ方がより適切だと思われるが、本稿では弱変化過去という名称を使用することとする。
- 3 文法化 (grammaticalization) と形態化 (morphologization) の関係については、Sihler (2000: 255), Hopper and Traugott (2003: 140-159 §6.2) などを参照。
- 4 これまでの文法化研究の歴史については、Hopper and Traugott (2003: 19-38) を見るとよい。
- 5 単一語化 (univerbation) は「句が合体して単一の語となること (coalescence of a phrase into a single word)」と定義され、現代英語の *alive* が古英語の *on līfe* から発達した事例などがそれに当たる (Sihler 2000: 279)。Hopper and Traugott (2003: 145) も参照されたい。
- 6 印欧祖語において、当該語根からは語幹形成母音によらないアオリスト形 (athematic root aorist) *d^heh₁-m/s/t ‘I, you, (s)he put, set, made’ が形成されていた (LIV 2001: 136 などを参照)。
- 7 動作を表す弱変化動詞は、*sōkjan ‘seek, look for’, *wurkjan ‘work, make’ (弱変化 1 類)、salbōn ‘annoint’ (弱変化 2 類)、*pewān ‘enslave, subject’ (弱変化 3 類)、*waknan ‘wake up’ (弱変化 4 類) など多数が存在する (Ringe 2006: 252-260 などを参照)。

- 8 状態を表す弱変化動詞の例として、弱変化3類 **þagian* ‘be silent’ (Go. *þahan*, ON *þegja*, OS *thagian*, OHG *dagēn*), **habjan* ‘have’ (Go. *haban*, ON *hafa*, OE *habban*, OS *habbian*, OHG *habēn*)などを挙げることができる (Ringe 2006: 257などを参照)。また、過去現在動詞の語義は概ね、状態を表すものであったことに注意したい (Warner 1993: p.194 §8.4.2 (a); Tanaka 2011: 60f.などを参照)。
- 9 Ringeによるアレグロ形式説への批判は、Hill (2010: 420)にも見られる。
- 10 当該の文法化のメカニズムをより詳しく考察したものとして、Lehmann (1992: 402f.)も参照されたい。

参 考 文 献

- Collitz, Hermann (1912) *Das schwache Präteritum und seine Vorgeschichte*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Fulk, R. D. (2018) *A grammar of the Early Germanic languages*. Amsterdam: Benjamins.
- Harðarson, Jón Axel (2018) “The morphology of Germanic.” In Klein, Jared, Brian Joseph and Matthias Fritz (eds.) *Handbook of historical and comparative Indo-European linguistics*, Vol. 2, Berlin: Mouton de Gruyter, 913-954.
- Heine, Bernd and Tania Kuteva (2002) *World lexicon of grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hill, Eugen (2010) “A case study in grammaticalized inflectional morphology: Origin and development of the Germanic weak preterite.” *Diachronica* 27:3, 411-458.
- Hilpert, Martin (2011) “Grammaticalization in Germanic languages.” In Heine, Bernd and Heiko Narrog (eds.) *The Oxford handbook of grammaticalization*. Oxford: Oxford University Press, 708-718.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott (2003) *Grammaticalization*, 2nd edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lass, Roger (1987) *The Shape of English*. London: Dent and Sons.
- Lehmann, Christian (1992) “Word order change by grammaticalization.” In Gerritsen, Marinel and Dieter Stein (eds.) (1992) *External and Internal Factors in Syntactic Change*. Berlin: Mouton de Gruyter, 395-416.
- LIV (2001) *Lexikon der indogermanischen Verben*, 2nd edition, comp. by Helmut Rix et al. Wiesbaden: Reichert.
- Prokosch, Edward (1939) *A comparative Germanic grammar*. Philadelphia: Linguistic Society of America.
- Ringe, Don (2006) *A linguistic history of English*, Vol.1: *From Proto-Indo-European to From Proto-Germanic*. Oxford: Oxford University Press.
- Sihler, Andrew L. (2000) *Language and history: An introduction*. Amsterdam: Benjamins.
- Tanaka, Toshiya (2011) *A morphological conflation approach to the historical development of preterite-present verbs: Old English, Proto-Germanic and Proto-Indo-European*. Fukuoka: Hana-Shoin.
- Tops, Guy A. J. (1974) *The origin of the Germanic dental preterit: a critical research history since 1912*. Leiden: Brill.
- Trask, R. L. (2000) *The dictionary of historical and comparative linguistics*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Warner, Anthony R. (1993) *English auxiliaries: Structure and history*. Cambridge: Cambridge University Press.